



森林レンジャーがゆく (102)

里山の王子、さようなら？

猛きん類は、生物生態系の頂点に立つ存在として、カラス、ハト、ムクドリなどの鳥類やほ乳類などの増加を抑える重要な捕食者です。しかし、これまでに営巣場所の破壊や密猟などにより、人間は猛きん類を追い詰め、数を減らしてしまいました。そして、現代の環境問題も上乘せし、生息が危機的状況にある種類もあります。このため、日本に限らず世界でも猛きん類に対する保全の優先順位はトップレベルとされています。私があきる野の重要な猛きん類の調査や保全活動を始めて10年になりますが、2018年は記憶に残る残念な繁殖結果になりました。これまで調べてきたクマタカやオオタカ、サシバなどの重要な猛きん類の全てのつがいの繁殖が失敗しました。まれな出来事であってほしいと思いましたが、生息状況は一貫して悪化傾向を示し、今年も2018年に近い結果になってしまいました。特に心配される夏鳥のサシバは、2018年に続き、翌年も繁殖に失敗しました。ほ乳類による巣への侵入が原因とみられます。そして今年、市内で繁殖していた同じつがいは、例年どおり飛来しましたが、約1か月で行方不明になり、繁殖は確認できませんでした。通常、水田などの開放的な環境で獲物を狩るサシバですが、西多摩エリアでは徐々にそのような狩場が無くなってきています。営巣をあきらめてしまう原因を考えると、東京の里山の環境悪化が進んでいることを改めて実感します。トウキョウサンショウウオなどと並び、里山の環境の代表者であるサシバが、あきる野から姿を消したことにより、今後は子育てが見られる可能性は低いと推測しています。東京で繁殖する最後のサシバのつがいの可能性もあるため、重大な出来事であると思っています。私自身、その保全に力不足だったことが無念でなりません。自然に関心が高まっている時代であるにもかかわらず、複雑で難しい環境問題が多く、悪循環が相次ぐ中で絶滅危惧種の絶滅カウントダウンが続いています。(パブロ)



あきる野で繁殖していたサシバ
(2015年撮影)